

立教大学学術推進特別重点資金(立教 S F R)

大学院学生研究

2020年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	社会学研究科	社会学専攻
研究代表者 (2021年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 5年 (学生番号: 16sb0041)		菅森 朝子 印
指導教員	所属部局・職		氏名
	社会学部・教授		吉澤 夏子 印
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	乳がん同病者関係に関する社会学的研究		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2021年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	研究代表 社会学研究科・社会学専攻・博士後期課程 5年		菅森 朝子
研究期間	2020 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 150,000円 / (採択金額) 150,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、乳がんの経験において同病者に出会い、関わることの意味を明らかにすることを目的とした研究である。乳がん同病者の関係性とらえるために、乳がん経験者へのインタビュー調査と患者団体のイベントや集まりを参与観察して得たデータをもとに、「ピア・サポート」「女同士の友情」「継承関係」の視座から検討を行った。研究成果については、社会福祉研究所開催の研究例会で報告したほか、博士学位論文を提出した。また、論文を作成し投稿した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[乳がん] [同病者関係] [女同士の友情]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の成果は以下の2点である。

1. 文献調査とインタビュー調査の結果から分析を行い、乳がん同病者の関係において「ピア・サポート」「女同士の友情」が交差する状況があることを指摘し、その構造を明らかにした

先行研究において、乳がん同病者関係は「ピア・サポート」の典型的な性格を有することが指摘されてきた。けれども、研究代表者が調査を進めていくうちに見えてきたのはもっと多面的な関わりを含むことである。乳がん罹患者の99.5%は女性であることから、乳がん同病者の関係は意図せざるとも結果的に女性同士である。そうであるならば、「女性同士の友情」としてジェンダーの視点から乳がん同病者の関係をとらえることができるのではないだろうか。他のがんの患者会と比較したときに、とりわけ乳がんの患者会が活発で盛り上がっていることの背景には、病気との付き合いが長期におよぶ慢性疾患であることが主な要因としてあげられるが、女性ばかりの同性のグループであることも大きな要因ではないかと考えた。

研究代表者は、インタビューで話を聞く際に当初は家族に関する質問を特にしていなかった。インタビュー後にトランスクリプトをみて、家族に関する語りに厚みがあり際立っていることに気づいた。中でもとくに語られることの多かった、夫／子ども／実の母親に語りを分けて、分析を行った。家族との関わりについては、病気について家族がわかる／わからないという「理解をめぐる問題」が多く語られていた。

「痛みは個人的なものである」(Frank 1995=2002) という意味において、病気を経験していない家族には病気による痛みや辛さが伝わらず、病者が家族の中で孤立してしまう状況がある。さらに、乳がん罹患者は、家族の中で母・妻・娘・嫁の役割を担う人が多いことから、「家族という私的領域のただ一人の責任者」(牟田 2009:70) という立場によって、家族に対して病気の辛さを伝えないという点でも孤立を余儀なくされる状況にある。「疾患のカテゴリー」と「ジェンダーのカテゴリー」、二重の意味において乳がんを経験した女性は家族の中で孤立しやすい状況に置かれると言える。

続けて、本研究の調査協力者は、家族にわかってもらえない話に続けて、わかってもらえないことを同病者と共有する話を一連の話として語っていることに着目し、そのことが何を意味しているのかを検討した。乳がんを経験した女性は、病いによって「閉ざされ」ているだけでなく、家族を「情緒面でサポートするという役割」を持つ「ケアの担い手」であるがゆえの「閉ざされ」た状況に置かれている。同病者に出会うことは、二重の意味で「閉ざされ」た状況から「互いに開かれる」経験である。そのことが、乳がん同病者同士が相互に理解しサポートして、親密に支え合う関係を生み出していると言える。「ケアする」女性は、同じような立場を共有する女性との関係の中でお互いに理解しあうことで、孤立した状況から連帯に開かれていることが明らかになった。

2. 乳がん同病者の関係性について研究を進めていくなかで「ピア・サポート」「女同士の友情」に加えて「継承関係」があることを提示した

研究代表者は、乳がん同病者の関係性について「ピア・サポート」「女同士の友情」の2つの視座より検討を行っていた。研究を進めていく過程で、「継承関係」としてとらえられるのではないかと気づいた。

乳がん同病者の関係の中で展開されている「継承関係」について、誰に向けて、何を、どのように継承しているのだろうかという問いを立て、分析・考察を行った。その結果、3つの継承関係を明らかにした。

第1は、乳房再建を検討する人に「具体の乳房」を伝えることがあった。研究代表者は2014年より乳がん経験者への調査を開始した。2013年・2014年は乳房再建手術が保険適用となった年だったこともあり、乳房再建に関する情報共有が積極的に行われた時期に重なった。

研究成果の概要 (つづき)

実際の乳房を直接見る・触ることによる継承は、「乳房再建経験者の生の姿を見たい」「自分の中で納得できるものを見つけたい」「こんなはずじゃなかった」という後から来る人の「助けを求める呼びかけ」(Frank 1995=2002: 246)に答える形で行われていた。フランク(Frank 1995=2002)が「病いの物語」の共有において想定したのは「聴くこと、語ること」であったのに対して、本稿で見てきた乳房再建をめぐる同病者関係の中では、生身の身体を直接見る・触ることがより重視されていた。再建乳房を直接見て触れる非言語的な要素によって、初めて伝わるリアリティがある。再建経験者の「生の姿」、実際の乳房に見る・触れて、自分の身体をそこに重ねて「ようやく自分の中であらう、こうしようということを考えられる」。乳房喪失の苦しみの中で見えなくなっていた自らの乳房の行方を検討できるようになっていた。「先輩」からの継承を受けた人は、「恩返し」として自分が「先輩」になって「後輩」の患者に受け継ぐ。こうして脈々と続く乳房再建の継承があった。

第2は、恐怖や不安の中にいる人に「あのときの自分」が聞きたかった言葉を伝えることがあった。乳がんの経験では、強い恐怖や不安の感情を抱えながら過ごす。その恐怖や不安は、時に誰かのたった一言によって緩和されることもある。乳がん同病者の関係では、恐怖や不安を経験した人が、かつての自分のように強い恐怖や不安の最中にいる他者に向けて、「あの時の自分」に声をかけるように言葉を伝えていた。それは他者の不安や恐怖を和らげること、「希望」をもたらすことであると同時に、絶望的な気持ちを味わった過去の自分を癒すことであった。その言葉を必要とする人は、目の前にいて直接言葉をかけられる場合もあれば、いま目の前にはいない場合もある。目の前にはいなくても、どこかにその情報を必要とする人はいる。彼女たちは、必要とする人に届くようにと願いを込めて、メディアを通してメッセージを発信していた。

第3は、社会に向けて乳がんの経験を継承することがあった。本研究で見てきた「継承」の宛先は、乳がんを経験した同病者の関係にとどまらず、社会に対しても開かれていた。がん罹患者の生存率は高くなり、がんは「不治の病」から「慢性疾患」へと変化してきた。しかしながら、「がんイコール死」というマイナスのイメージは今日もなお根強く残り、「がん蔑視」がなくなるという現状がある。そのマイナスイメージに抵抗して「払拭したい」という思いがある。社会を変えるためには、「私たちががん患者」が自ら声をあげて行動することが大切だとして、社会に対してさまざまな形で働きかけていた。

乳がん同病者の関係を論じた先行研究の中では、同病者関係において「再発」や「死」はタブーであるとされてきた。再発がわかった時点で「心理的な壁」が形成されて関係が下火になると言われてきた(高橋 1998)。しかし、本研究の事例からは、同病者の関係の中に「ピア・サポート」だけでなく「女同士の友情」や「継承」という概念を持ち、関係を組み換えることによって、「ピア・サポート」の限界を乗り越えられる可能性があることが示された。

参考文献

- Frank, A.W, 1995, *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethic*, Chicago: The University of Chicago. (=2002, 鈴木智之訳, 『傷ついた物語の語り手——病い・身体・倫理』ゆみる出版.)
- 牟田和恵, 2009, 「ジェンダー家族のポリティックス——家族と性愛「男女平等」主義を疑う」, 牟田和恵編, 『家族を超える社会学——新たな生の基盤を求めて』, 新曜社, 67-89.
- 高橋都, 1998, 「乳がん患者の相互扶助行動——わが国における病院内患者交流に着目して」, 久保紘章・石川到覚編, 『セルフヘルプ・グループの理論と展開』, 中央法規, 74-95.

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

菅森朝子、博士学位申請論文、「乳がんの経験を継承する——乳がん同病者関係の社会学的研究」、2021年3月

④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

菅森朝子「乳房再建は何をもたらすのか～乳がん経験者の語りから～」、社会福祉研究所第1回研究例会、2020年10月10日、オンライン開催